

調査ノート

J. グールド「鳥類図譜」の標本を求めて

玉川大学教育博物館長代理 山口 高 弘

栄華を極めたあのビクトリア朝時代のイギリスに生きたジョン・グールド(John Gould 1804-1881)はアフリカを除く全ての大陸に生息する鳥を、当時開発されたばかりの石版画にして手彩色を施す手法で描き、フォリオ版の豪華本として厳しい予約限定販売の方法で世に出した。彼には早世した妻エリザベスをはじめ、エドワード・リア、後にはH.C.リヒター、ウィリアム・ハート、ヨゼフ・ヴォルフといった優れた絵師達や、腕のよい石版画印刷所がついていた。

約 3000 点に及ぶ鳥の絵は例外なく、どれもまことに美しい。生きているように美しい。その鳥たちのとまる枝や巣も、背景の岩や水辺や草花も木々もとても美しく描かれている。

本学が 2001 年 5 月に予定している、ニューオータニ美術館を会場とする J. グールド『鳥類図譜』の展覧会に備えて、当時の鳥の標本や石版などが無いものか、あればそれは貸してもらえるものなのかを知りたいと、私は 4 月 30 日イギリスに飛びたった。午後成田から舞い上がった飛行機は、渡り鳥の北帰行のように白いシベリアを飛び続け、やがてフィヨルドを越えて、ついに夜にならないまま 11 時間余りでヒースロー空港に着陸した。

自然史博物館(The Natural History Museum)は、かつて大英博物館から自然史部門が独立して建てられたという博物館であるが、まことに壮大な博物館である。

案内された部屋はライブラリー・インフォメーション・サービス部門であった。対応に出た 1 人、Ann Datta 女史はかつて紀宮が訪問されたときに御案内役をしたという、グールドの専門家であった。早速当方の計画を伝え、借用について問うと、館蔵資料は資料に掛ける保険料、付き添う職員の費用の他は原則として無料で貸与するという。もちろん鳥の標本も、グールドによる鳥のデッサンもだ。さらに、可能な限りの協力をすると、にこやかに申し出られた。

貴重書室にも案内された。奥の書庫の上には鳥籠型のガラスケースが 6 つ置かれ、それぞれの中でハチドリが何羽も枝の回りを飛び交っている。これがグールドの作品だという。さすがに 150 年という年月はわずかな振動にも耐えられないかと



グールドが収集した鳥の標本(自然史博物館分館)



鳥類図譜の絵に対応する標本

思われるほど老朽化が進んでいた。これらは貸し出さないといいが、当然だ。

翌日はロンドン郊外のトゥリングにあるロス・チャイルド記念動物博物館に隣接する、自然史博物館の分室を訪問した。ここは一般公開はしておらず、おびただしい数の鳥の剥製標本を保管、研究する施設で、研究者に対する便は計っている。若い研究者 Frank D. Steinheimer 氏に案内されてまず見たのはあのダーウィンが集めた鳥の標本であった。カードに書かれた文字はダーウィンの直筆だという。これがダーウィンがガラパゴス諸島から持ちかえり、グールドと共に研究したあの 13 羽のフィンチなのだろうか。

グールドの「鳥類図譜」に使われた標本を見せてほしいと言ったところ、これだと決定できるものはないが、恐らくこれだろうと思われるものを見せようと幾つもの標本棚を開けて、無造作に素手で掴んで見せてくれた。

主任の Dr. Robert Prys-Jones の車で 1.6 マイルの道を駅まで送られたが夢のような 1 日であった。